

【翻 訳】

1948年から1970年における
マンチェスター大学平和学専攻の学生達のための
教育ならびにキャリア開発について
(マンチェスター大学 アレン・C・ディーター博士) (1)

片 岡 徹

翻 訳

1948年から1970年におけるマンチェスター大学平和学専攻の 学生達のための教育ならびにキャリア開発について (マンチェスター大学 アレン・C・ディーター博士) (1)

片 岡 徹

目次

1. 平和学プログラムの説明
(Description of the Peace Studies Program)
2. 調査方法について
(Approach of the Study)
3. 1948年～1953年：形成期
(The Formulative Period)
(以上, 本号 (1))
4. 1953年～1959年：強化期
(The Period of Consolidation)
5. 1959年～1965年：不安定期
(The Period of Uncertainty)
(以上, 次号 (2))
6. 1965年～1970年：再建期
(The Period of Rebuilding)
7. 未来への提言
(Recommendations for the Future)
8. 結論 (Conclusions)
(以上, 次々号 (3))

[要旨]

本稿は、当時マンチェスター大学において平和学プログラム長ならびに大学の副学部長という職にあったAllen C. Deeter (アレン・C・ディーター) 教授が1971年に執筆した報告書“Educational and Career Inventory of Peace Studies Students Manchester College, 1948-70”の翻訳である。同報告書では、平和学プログラムがどのように展開をしたかに関して、卒業生や在学生へ質問紙調査を行った結果が示されている。

なお、同報告書は分量が多いため、本号を含めて三回に分けて紹介をすることにする。また、オリジナル文書はマンチェスター大学図書館アーカイブス資料室に保管されている。

(解説)

北星学園大学の海外協定校の一つである米国マンチェスター大学は、1948年に世界ではじめて学部レベルで平和学専攻 (Peace Studies major) を設けたことで知られ、2018年に70周年を迎える。かつて、日本に平和学を体系的に紹介した岡本三夫 (1993) は米国における平和学の歴史を紹介する中で、「米国の大学における平和学講座のモデルは、冒頭で触れたマンチェスター大学が開

設した平和学講座 (Peace Studies Course) で、… (中略) …この平和学講座は、学際的な内容のカリキュラムとしては先駆的試みであって、『それ以後のほとんどすべての平和学講座の原型となった』(Kenneth Brown) といわれています。」と述べた(p.45)。ただし、その後岡本は1999年に『平和学 その軌跡と展開』(法律文化社)とする体系的な著書を発表するが、そこではマンチェスター大学に関する詳しい記述は出ていない。岡本は日本に平和学を定着させようと試みた研究者であ

キーワード：アレン・C・ディーター, プレズレン教会, グラディス・ミュアー

Key words: Allen C. Deeter, Church of the Brethren, Gladdys Muir

り、岡本の研究のキーワードは「平和学の制度化」である。例えば、同書の第 2 章「平和学の構想」では、1. 平和学の構想、2. 平和学の方法 (1) 学際的アプローチ (2) システム論アプローチ (3) 「エクスポージャー」としての平和学、3. 専門としての平和学、という構成となっている。岡本 (1999) はこのように平和学の制度化のプロセスを紹介した。

しかしながら、平和という言葉が文脈によって多様な意味合いを帯びるように、平和学も同じく設立の経緯からカリキュラムに至るまで実は多様である。にもかかわらず、平和学という名称の学問が定着することに焦点が置かれているがゆえに、例えば日本では平和学の設立過程史を研究として位置付けたり、さらには平和学そのものを批判的に検証したりするという姿勢がこれまで十分に取られてこなかった経緯がある。

以上のような問題意識を踏まえて、筆者は別稿においてマンチェスター大学の平和学プログラムが設立に至るまでの経緯について、当時のヴェルノン・F・シュワム学長の役割に焦点を当てて彼が尽力した過程を、マンチェスター大学図書館に保管されているアーカイブス資料を主として用いて明らかにした (KATAOKA 2017)。しかし、これは全体像の一端を示したに過ぎず、更なる研究の蓄積を必要とするのが現状である。本翻訳が対象とする著者は前述したアレン・C・ディーター先生だが、彼はマンチェスター大学を平和学を専攻して卒業した方であり、そして博士号を取得した後に同大学で平和学プログラム長として同プログラムを文字通り立て直した方でもある。ヴェルノン・F・シュワム学長の時代にマンチェスター大学で学生として過ごし、そして初代平和学プログラム長であるグラディス・ミュアー教授から直接学んだディーター先生だからこそ成しえた賜物と言えよう。その意味で、マンチェスター大学の

平和学プログラムが設立以後にどのようなカリキュラム等の展開があったのかについて検証する際に、研究上大変重要な価値を有する報告書であるといえる。なお、本文には目次の前に章の記載はないが、読みやすさを考慮して記載した。また、この報告書ではミュアー教授のことを Dr. Muir と表記しているが、ミュアー教授は博士号を取得していなかったため、翻訳ではミュアー教授と表記したことを予めお断りしておきたい。当時の関係者によれば、博士号の取得の如何を問わず、このように呼ぶことが日常的であったようである。

(翻訳)

1. 平和学プログラムの説明

この 22 年間に渡り、マンチェスター大学は戦争と平和、社会的無秩序、そして紛争解決の諸問題に関する学際的な研究 (interdisciplinary study on the problems of war and peace, social disorder and conflict resolution) に焦点を当ててきた。グラディス・ミュアー教授のリーダーシップの下で、この平和学プログラムは異文化理解、暴力に対する人間の傾向に対する歴史的・哲学的知見、そして集団間ならびに国際紛争を制限するために努力という点に力点を置いて 1948 年に始まったのである。ミュアー教授は、国際連盟の時期にエジンバラやジュネーブで学んだ古典的な歴史学者であり国際問題を学んできた者として、彼女は世界秩序の諸問題を扱う際に、外交や国際組織、国民国家の働きを説明する時には社会哲学や政治哲学にも注意を払うような科目を設定してきたのである。彼女はクエーカー (Quaker) や東洋の神秘主義 (oriental mysticism) に深い関心を寄せながら教えてきたのだが、しかし決して授業は攻撃的な形

式ではなく、大変説得的な人柄と授業スタイルであった。彼女の人柄を知ることなしに、教員として、そして生きた好例としてのミュアー教授を理解することは難しい。ミュアー教授がマンチェスター大学を去り、そして亡くなってからしばしば提起される問題の一つに、この平和学プログラム開始時のインパクトが彼女の働きと人柄に大いに依拠していたのかどうか (whether the program's early impact rested largely on her work and personality), という点がある。質問紙やインタビューを通して、この点を評価しようと試みている。

1959年にミュアー教授は年老いた母親の健康状態を考慮してカリフォルニア州へと移る必要が出たために、早期退職した。ミュアー教授が戻ることはないだろうということが明らかになった直後に、平和学プログラムでは幾つか変更点が出てきた。1959年から1965年までは、教員数が限られていることもあって基本的な平和学の科目をしっかりと提供することがままならなくなってしまった。その後、シュール教授 (Dr. Schuhle) が1961年に平和学プログラム長に任命された。最終的には、大学の組織的な総点検と平和学に関する様々な科目を教えていた教員たちの働きの結果として、1965年の秋に紛争解決や公共問題、そして国際関係に対して社会科学やコミュニケーション理論によってアプローチすることに重きを置く (more emphasis on social science and communications theory approaches to conflict resolution, public affairs and international relations) 新しいカリキュラムが開始された。そのため、歴史的、哲学的、そして宗教的な科目群については割愛されてしまったのである。この時期に平和学の科目を履修する学生の数や平和学を専攻の数は少なかったのだが、その幾つかの理由には学生の時間割の関係で提供されている科目を履修できない、ということもあった。

1967年にシュール教授が辞任したことに伴い、平和学プログラムは再度吟味されることになった。その2年前となる1965年に定められた方向性は、「宗教、イデオロギー、そして戦争」に関する科目や1959年以来提供されてこなかった「文明の哲学」の再配置など、現代の文明や社会哲学の諸問題に新たな焦点を当てて科目を増やすことにあった。私 (ディーター教授) は1967年から1968年の中頃に平和学プログラム長に任命された。1968年から1969年にかけて、在外研究としてハーバード大学やアジアで研究に専念していたが、その理由の一部がこの平和学プログラムを再編するためであった。1965年からは様々な領域の専門家たちによって平和学プログラムが学生たちに提供される運びとなった。例えば、非西洋学と国際情勢のバーク教授とワス教授、コミュニケーション理論、社会心理学ならびに対人間・対集団間紛争のケラー教授とコルバーン教授、国際政治、行政、そして紛争解決のシュール教授とヨハンセン教授、社会哲学、倫理学、そして宗教的局面的のブラウン教授とディーター教授、などである。ラテンアメリカやアフリカ、そしてアジアの諸問題や社会科学に関する専門家による支援は教員増や担当科目の充実化によって可能となり、学生たちに科目が提供されることになった。1959年以来、学生たちは複数の専攻 (平和学に加えて他の専攻) を持つように励まされてきたのだが、新しい必修科目を設置した1965年以来、幾分か履修しやすくなったのである。数多くの既存の学科の専攻が平和学と更に繋がり始めたのである。平和学を履修ならびに専攻する学生の数は、科目の増加と1965年以降に平和学プログラムへより注目が集まったこともあって大いに増加したのである。

2. 調査方法について

様々な形で展開してきた平和学プログラムを過去22年間にわたって学生たちの反応を評価することが、この調査の目的である。現在ならびに過去の学生たちによるこのような評価や示唆は、次の10年を見据えた平和学プログラムの制度設計の糧となるだろう。質問紙は科目や学んだ教材の価値、教員によるカウンセリングや面談、課外活動の機会、大学院への準備、そして更なる教育や職業上の方向性について焦点を当てている。

自由記述型による21の質問（幾つか小問を含めている）が、過去に2科目以上平和学の科目を履修していた125名に送られた。卒業した35名の平和学専攻と現在の5名の平和学を専攻している学生たちは、この125名に含まれていた。そのうち55名から回答を得ることが出来た。質問紙が届かなかった数名の卒業生については、電話による調査を実施した。私たちが保有していた卒業生の連絡先が必ずしも最新のものとなっておらず、名簿に反映されていなかったためである。投函は7月6日に行われ、その8週間後に分析を行ったのだった。

個人的なコメントは多岐にわたり、かつ多様であったため、この報告書では平和学プログラムの将来設計に役立つと判断される質問への反応を要約して掲載している。記入式の質問はこの要約とともに回覧され、既にいくつかの場で教員たちや平和学委員会、そして大学執行部によって目を通されている。この要約は回答者へと郵送され、その結果の要約版は、この秋の発行に向けて今準備を進めている『平和学研究所紀要』(the Bulletin of the Peace Studies Institute)に掲載する予定である。

卒業生の記録や今後の教育や職業上の経験に関する質問紙から得られたデータもまたこの報告書の中に合わせて掲載される。ま

た、これまで述べてきた平和学プログラムに関する歴史的な情報も、質問と回答を説明するために含まれている。そして、それらをそれぞれの時代の平和学プログラムで強調された点や教材を評価する際に活用している。また、学生たちはいつ平和学の科目を履修したのかによってグループ分けされている。最初のグループは、1948年から1953年に科目を取った学生たちである。朝鮮戦争の休戦状態に伴い、学生たちは国際問題よりも国内問題に関心を示す傾向 (some tendency among students to focus on domestic rather than international problems) があるように思われ、そして明らかにより世俗的な職業 (more secular vocations) を選ぶ傾向にあったが、この傾向は次のグループで更に顕著となる。第三のグループは、ミューア教授が退職した1959年から新しい科目が提供された1965年と1966年までのグループである。最後の時期は、新しい科目が提供された後に平和学で数多くの科目を履修している学生たちを含んでいる。

3. 1948年～1953年：形成期

初期の科目が掲載されたシラバスの検討とこの質問紙への回答からは、当初の平和学プログラムという組織の変化は、何よりも献身さと高度に表現されるところの平和創造という哲学を持つ使命感に満ちた平和を作り出す人々に依拠している、という仮定の上に築かれたことが見て取れる。平和学プログラムは、平和を作り出す人となるために十分な関心と知識を持った個人を育てようと追求したのだ。このようにして、初期のプログラムはアプローチの仕方においては信念的であり哲学的 (both convictional and philosophical in approach) であった。それは平和的な生活の方法と対人間と国家間の和解や異文化理解、相互扶助のための機会 (the

chances for reconciliation, intercultural understanding and mutual helpfulness among men and nations) を軽減するように思われた理念と価値観に反対の決定をすることも追求していた。多くの歴史的、政治的、そして社会科学のデータや分析が導入された一方で、当初の平和学プログラムは数多くの学生たちに自分自身の人生観や宗教的な関わり方を再び考えさせ、またはさらに明瞭化する手助けをしていたのである。

初期の学生たちによる多くの反応によれば、ミューア教授は偉大なる個人的なインスピレーションやチャレンジの源 (a source of great personal inspiration and challenge) であった。その学生たちは平和学プログラムとその目標をほとんど全くと言ってよいほど個人的な関わり方やライフスタイル、そして学問的な関心やアプローチと同一に見ていたようである。少数の学生にとっては、その後の教育や経験に照らしてこれが否定的な感情にも映っていた。しかしながら、大半の学生たちにとって「平和学」とは、ミューア教授が教室で、そして例えばミューア教授の自宅で毎週の紅茶の時間や夕食を招待されたり面談をしたりするなど、比較的保守性が強いキリスト教会の大学にあって、挑発的なほどリベラルで、人間主義的で、そして偏狭ではない考えを持つ源として (as the source of many provocative liberal, humanistic and anti-parochial ideas in a comparatively conservative church college), 日常における多くの関わりの中でミューア教授が体現していたものを示す傾向にあった。このようにして、この初期の時期には1959年にプログラム長を退職した後とは対照的に、平和学プログラムに対する学生たちの反応は、しばしばミューア教授自身や彼女の重視していたことや人柄を指していたのである。

ミューア教授の一般的な理解に加えて、学生たちの間には友愛の精神という顕著な感情

があった。数多くの学生たちは人生の決断や職業選択をする際には、教員よりも仲間の学生たちから導きや支援を受けたということを示唆していた。初期のプログラムにおいて最も顕著に欠けていたことは職業ガイダンスであるように思われる。特に平和学専攻の学生たちに、平和学の科目を履修しながらも別の領域を専攻していた学生たちとは対照的に、これが該当していた。多くの初期の学生たちは神学校へと進み (すべてではないが、この時期の学生たちで回答をしてくれた20人に4人がそうであり、他の学生たちは別の領域で大学院へと進んだ)、そして結果的には各自が牧師や使節団、または教会関連の大学で教える道を選んでいった。ごく少数の学生たちしか大学卒業後に何を職業として選択するかを明確にはしていなかった。平和学プログラムの高い理想主義は、難題の源であると同時に職業上の不明瞭さの源でもあった。多くの学生たちが所属する平和教会の背景や絶対平和主義だけではなく、ガンジーのような社会的、政治的戦略に強調点を置いたミューア教授は、学生たちに平和を中心に据える人生の仕事のための効果的な道として、行政組織で働くことをほとんど推奨しなかった。国際連合や個人または教会組織の国際職員は大いに奨励され、多くの学生たちは海外で人道ボランティア (無償ないしは生活に支障はない程度に) や難民支援、ワークキャンプ、そして平和教員の役割として少しの時間を過ごしたのであった。

平和学を専攻はしなかったが、2ないしそれ以上の科目を履修した人向けの質問紙を受け取った37名の中で、22名は神学校へ進み、何人かは医学校へ、そして残りの学生たちは公立学校で教員をしていた。この時期の10名の平和学専攻の学生たちは、現在は神学校やブレズレン教会 (Church of the Brethren) の大学で教えている。このことは、平和学に魅力を感じた学生たちの傾向を

示している。例えば、宗教的、哲学的なアプローチを伴うプログラムを強調することや第二次世界大戦や朝鮮戦争の直後の時期に照らして宗教的な関心を抱くという一般的な文脈である。回答者の約半数が大学における学びが間違いなくその後の大学院での研究に大いに役立ったと言っていた。ただ、1名はそうではなかったと言い、別の1名はギャップがあったと言っていた。別の者は神学校での学びに大いに役立ったと述べ、しかもその後に進んだ博士課程よりもそうであったと述べた。最初の44名の平和学の学生たちの18名のうち5名が医学 (medicine)、8名が宗教学 (religion)、3名が歴史学 (history)、2名が社会学 (sociology) で、その他化学と教育学 (chemistry and education) で博士号を取得している (そして2名が現在博士論文を執筆中である)。博士号を取得した大学院は、ハーバード大学 (Harvard) (2名)、ペンシルバニア大学 (Pennsylvania) (1名)、ノースウエスタン大学 (Northwestern) (1名)、プリンストン大学 (Princeton University) (1名)、プリンストン大学神学校 (Princeton Seminary) (1名)、ボストン大学 (Boston) (1名)、ドゥーク大学 (Duke) (1名)、オハイオ州立大学 (Ohio State) (1名)、バンダービルト大学 (Vanderbilt) (1名)、インディアナ大学 (Indiana) (1名)、テキサス大学 (Texas) (1名)、イリノイ大学 (Illinois) (1名)、ミシガン大学 (Michigan) (1名)、ウイスコンシン大学 (Wisconsin) (1名)、である。このように、初期の学生たちにおいては、力強い学問的な動機付けがあったことは極めて明白である。我々が知るところによれば、質問紙や卒業生調査に基づいて考えるならば、せいぜい最初の44名の中で2名ないしは3名のみが大学院修士課程や博士課程、または神学校へは進まなかったのである。

現在の学生たちに平和学の科目を取るよう

に勧めるかどうかという質問への回答の中で、14名が大いに勧めると回答し、1名が勧めないと回答した。平和学専攻としては、7名が勧める、1名は勧めないと回答した。他の専攻と一緒にであれば勧めると4名が回答している。多くの学生たちは、平和学を専攻しなくても平和学がとても重要な学びであると考えていた。勧めないと回答した1名の学生は、世界や人間関係を理解する際に誤解を与えると感じていた。その他の学生たちも、もはや現在の平和学プログラムや教員について分からないため推奨も非推奨も出来ないゆえに回答することが出来ないと言っていた。

「現在の職業が、どの程度平和学との出会いによって影響されたものですか (To what extent is your present occupation a result of your contact with Peace Studies?)」という問いに対して、5名が自分自身の人生に大きな変化を与えたと答えていた。他の多くは、既に考えていた決断を強化するのに役立ったと答えていた。3名が今歴史を教えているが、その理由はミュア教授による平和学の強い影響を受けたため、と答えた。2名が影響はないと答え、両者とも医学と化学という極めて異なった道へと進んだからである。各自の学びが現在の職業に関連付けられたという多くの事例が指摘されていた。数名は平和学の科目を履修したことで、そこで学んだ知見を活かしてゼミを率いたり国際的なワークキャンプを開催したり、そして助言を与えたりしていると言っていた。

8名は大学院や将来の職業計画に関連して十分に面談をして頂いたと言っていた。1名は不十分であったと述べ、また、多くが既に確固とした目標があったために面談が必要ではなく、特段必要だとは考えていなかった、と言っていた。ある学生のコメントによれば、「平和学は職業の準備として私に影響を与えたことは決してなかった。カントの哲学に従

えば、平和学は『汝に神と自由と永遠の生命を与えているのであり、なぜパンとバターをもまた期待するのであろうか (God, 'freedom and immortality', why expect bread and butter also ?)』であった。平和学プログラムに対して強い批判をしていた学生は、「反俗世的で偽善的な宗教を強調することは、この時代にあつて非常に有害である。学生たちを奨励し、またはどうにかしてマンチェスター大学の4年生が経験も少ない中でプレゼン教会の神学校への進学を許可されることは、罪である」と言っていた。そして別の教会の神学校と大学院へと通ったのであった。この学生は決して他の人にマンチェスター大学へ通うことを奨励はしないだろう。それとは対照的に、他の大学院へ通った多くの学生たちは、平和学プログラムは彼らが視野を狭くすることから救ってくれて、そして彼らの視野を広げてくれたと言っていた。何人かの学生たちは平和学プログラムが価値の高いものであり、彼らの基本的な方向性を作り出す際に他の場で受けたどのトレーニングよりも重要なものであったと述べていた。

マンチェスター大学にあつては、何人かの他の先生方と同じようにミューア教授の人柄、または生き方や関心事が、回答者の多くにとってはとても重要であるとみなされていた。ほとんどの回答者にとって、人生でもっとも重要な影響と職業選択を区別することは難しいことであった。親や教員、そして友人たちは全て重要な役割を果たしており、回答者のほとんどによれば、しばしば役割が絡み合っていた。多くの学生たちが大学がそこで種または初期の発展の中にある信念と進むべき道を成熟させてくれたとコメントをしていた。

特定の科目のインパクトを検証しようとする時、「文明の哲学 (Philosophy of Civilization)」(15名)、「平和の基本哲学 (Basic Philosophy of Peace)」(14名)、そ

して「平和創造の原理と手続き (Principles and Procedures of Peacemaking)」(13名) という科目群を履修している学生たちの数は、「国際関係論 (International Relations)」(6名)、「永続的平和のための基礎 (Bases of Enduring Peace)」(5名)、「民主主義の基盤 (Foundations of Democracy)」(3名) よりもかなり多かつた。「文化史」の講読科目を履修した四分の三は翌年も履修しており、最初は11名、2回目と3回目は9名の履修者がいた。ここから読み取れるように、神学校へと進学する学生の数を見てみると、大学ないしは大学院で履修した科目の中で最も重要であると位置づけられた科目は、歴史学や文学、政治学、社会学などは少数ながらいるものの、やはり宗教学を専門とする学生が多数を占めていた。数多くの学生たちは、人生に関する哲学を育む際に、平和学プログラムの成功に関する各自の答えと平和学の科目で得られた重要な科目とアプローチという問いへの答えを関連付けていたのだ。ある者は「平和学は私の心を人間関係の領域で偉大な思想家や書き手たちへと広げ、そして臨床的な牧師教育のために良い基盤を敷いたのです」と言い、別の者は、古典を講読することが「私が感じていたよりもはるかに有益であり、というのは緻密な方法で私の個人的な理解を拡大したからである」と述べていた。これらの科目は「私の教育の貴重な一部であり、それがなかったならば私は路頭に迷っていただろう」と、また別の者は言った。マンチェスター大学で化学を専攻し、しかしその後神学校へと進み、そして神学で博士号を得た学生からは、「これらの科目は、恐らくは私の思考に大きな影響を与え、そして私がそれ以降に持ったいかなる他の教育経験よりも、私の人生や職業の中核を占めることになった」と述べていた。学生たちが個々の平和を創り出す者に関する学びをどのように評価していたかという問いは、数多く

の肯定的な反応を、しかし少数の否定的または曖昧な反応を誘い出していた。主として、これらの生ける例という具体性が賞賛されていた。中には、賀川豊彦やガンジー、そしてシュバイツァーのような人物に焦点を当てることは良い選択ではないと感じる学生もいた一方で、多くの学生たちにとっては、全体的な価値や具体的な働きの状態 (total values and their concrete forms of work) という観点からこれらの人物は同一視し得る人物であった。少数ではあるが、後年にはこのようなアプローチへの強調がなかったことがとても良かったと感じた者もいた。

ミューア教授による歴史哲学、とりわけトインビー、ソロキン、シュバイツァー、そしてスベングラの著作を通してそれを強調することは、平和学をこの時期に学んだ学生たちに他の教材ほどには感謝されなかった。何人かは、それらの人物が一面的であり、偏ったアプローチであったからだと答えた。多くの感謝のコメントがありながらも、より多くの批判は他のどこよりもこの箇所に浴びせられていた。歴史学で博士号を取得した者は、以下のようにコメントをした。

「ミューア教授の科目が、ソロキンや他のアプローチに重きが置かれていたことはその通りであるが、大学での学びは一般的に別の方向に重きが置かれていたこともまた真実である。すなわち、ある者はより統合的で一般化されたアプローチというよりはむしろ技術的な何かを得るのである。ソロキン、トインビー、そして少なくとも薦められた残りの者たちは、最終的には十分であるとはならないかもしれないのだが、大きな問題を見るように努めるのである。誰かが言っていたように、我々の大学は全て学びの枝に参与しているのであるが、根は何もないのである。」

その多くが宗教や個人的な哲学の領域にの

めり込んでいたが、大学やまたは卒業後に読んだ本の中で最も優れていた本ということについては、一致したものは一つもなかった。大学へやって来た数多くの講演者が、学生たちに重要な貢献をしたと言及されていた。「彼らなくしては、大学は不毛であっただろう」とある者は言った。「この講演者たちとチャペルの人々は、私を平和学へと突き動かす際に最も重要な人々でした」と別の者は言った。ヘンリー・ヒット・クレイン、賀川豊彦、ノーマン・トーマスが最も大きな影響を受けたとして何名かによって言及された。社会主義者であるノーマン・トーマスの影響は何人かには肯定的な評価であったが、他の多くにとっては否定的な評価であった。全体的に、リトリートや特別な集まりを伴った大学生活という側面は、この時期の学生たちによって極めて高い評価を得ていた。

個人的な付き合いや面談という相対的な重要性を評価する際には、ある者が「様々なインプットがお互いを強化しており、私は平和学なしにマンチェスター大学を想像することは出来ない (I cannot imagine Manchester without Peace Studies)」と言っていたように、数多くの学生たちが同意していた。コースワークを通して得られた修養や知見は、それぞれの交際範囲や授業外における関与を刺激した。何人かは、教員たちや学生たちによって示された学問的関心と個人的関心の間に良いバランスがあったとコメントをしていた。「これはまさに教育そのものであった」「良いバランスがあった。高等教育プログラムにおいてユニークと呼ぶべき何かがある」と博士課程に所属している際に、多くの考え方をマンチェスター大学で学んだことを放棄した、とある学生が言った。この全てが「かなり役立った。なぜならば、私が探し求めていたまさにその時に出会ったからである (because it came at a time when I was searching)」。これはある学生の言葉だが、しかし多くの学

生たちに特徴的なものであったように思われた。すべての点において否定的であったり的外れであったりするような明らかな2つの例外を除けば、この時期の学生たちは、全ての大学におけるプログラムや強調点に対して心を開いており、そしてよく反応をしていた (most open and responsive) ようだ。そして平和学が彼らの多くにとってマンチェスター大学での全ての経験を通して最も良かったものとしての縮図 (the epitome) であったように思われる。

何人もの教員たちや二、三の例ではその妻たちが役に立つアドバイスを学生たちに与えてくれたとして言及されていた。何人かはその集まりが役に立つグループ・セラピーや導きを提供してくれたとコメントをしていた。マンチェスター大学での経験において最も批判的であった学生は、弱点の一つとして脆弱なカウンセリングを指摘していた。人々はケアをし、手助けしようと努め、そうした事実にもかかわらず、彼らの専門的技術の欠如は悪い経験となったのである。中にはカウンセリングをする関係性においてミュアー教授の慎重さ (reserve) に関してコメントをした者もいる一方で、しかし学生時代のみならず後年においても、やはり今でもなお彼女との親密な接触に対して大いに感謝をしていた。多くの学生たちはカウンセリングがこのようなプログラムの中で重要な役割を果たすと指摘していた。何人かはさらにこれに注目をするように促していた。

政治的関与にかかわる質問やプログラムへの提案は、平和学に関わった学生たちの時代によっては異なっているようには思われない。それゆえに、これらの質問は最後の区分 (1965年～1970年：再建期) において要約したいと思う。

(次号へ続く)

(謝辞)

最後になるが、この翻訳を許可し筆者に励ましを与えてくれたキャサリン・グレイ先生 (マンチェスター大学准教授・平和学プログラム長)、ジェニー・バイン氏 (マンチェスター大学図書館アーカイビスト)、そして故・ディーター先生の3人のご子息であるデイビッド・ディーター氏、ダン・ディーター氏、マイケル・ディーター氏に心より深謝したい。また、筆者が北星学園大学の学生のとときマンチェスター大学に交換留学生として1995年に1年間滞在した際には、ディーター教授の「宗教と平和 (Religions and War)」を履修した。本翻訳でミュアー教授が学生たちに懇切丁寧に接している様子が出てくるが、私もまたディーター教授から同じように公私に渡って接して頂いたことをよく覚えている。ディーター教授は天に召されたが、その学生への真摯な姿勢は、今なおマンチェスター大学での平和学プログラムに良き伝統として根付いていることをここに付記しておきたい。

引用文献

- 岡本三夫 (1993) 『平和学を創る—構想・歴史・課題 (平和図書 (No.9))』 広島平和文化センター
- 岡本三夫 (1999) 『平和学 その軌跡と展開』 法律文化社
- KATAOKA, Toru, 2017, "President Vernon F. Schwalm: Church of the Brethren Leader as Founder of the 1948 Manchester College Peace Studies Program", *Brethren Life & Thought*, Volume 62, Spring 2017, Number 1, pp.47-59.